世界遺産講座

第24講

「百済歴史地区」と「飛鳥・藤原」

世界遺産講座第24講では、「飛鳥・藤原」ともつながりの深い世界遺産「百済歴史地区」について紹介します。

扶余郡と明日香村は1972年3月に高松塚古墳壁画が発見されたことを契機に、同年11月、姉妹都市提携を結び、50年以上にわたり交流が続いています。今回は、扶余郡に所在する世界遺産「百済歴史地区」の構成資産を紹介します。

「百済歴史地区」は、2015年に登録された韓国の世界遺産です。5世紀後半から7世紀後半までの百済王朝後期に、百済が中国との交流により都市計画の原則や建築技術、芸術、宗教等を受け入れることで、独自の高度な文化を築いたこと、また、それらを日本や東アジアに広めたことがわかる証拠として世界遺産に登録されました。8つの構成資産のうち、4つの構成資産が扶余郡に所在しています。

①「官北里遺跡と扶蘇山城」は、百済の泗沘時代（扶余郡に首都があった時代）の王宮があった場所です。官北里遺跡では礎石建ちの大きな王宮跡や工房跡、上下水道施設などが発掘されました。その裏手にある扶蘇山城は、普段は王宮の後苑として、また、有事の際の防御施設として築造されたことが分かっています。官北里遺跡と扶蘇山城は、世界遺産の構成資産となっている範囲が一体的に整備され、王宮跡の基壇や礎石が復元展示されています。近隣施設では1400年前の百済の首都であった扶余の姿をVR等で体感することができます。

②「羅城」は、泗沘の王宮を防衛するために築かれた城壁です。扶蘇山城から始まって、扶余の北と東を囲み、西と南は錦江（扶余郡を流れる川）が自然の防御壁として機能しました。当時の様子が分かる整備が行われています。

③「扶余王陵園」は、扶蘇山城から東に2km離れた場所に作られた羅城の外に位置しており、王族の墓と推定される古墳が7基あります。1号墳の石室西壁には白虎図が描かれており、「飛鳥・藤原」の構成資産候補である高松塚古墳やキトラ古墳とも関わりがあることがよく分かります。また、泗沘時代を代表する「百済金銅大香炉」（香をたくための器）もこの場所で出土しています。現地では、スタッフが世界遺産としての価値等を説明し、日本語の解説板やパンフレットも置かれています。

▲1号墳模型
（左側に白虎図）

④「定林寺址」は、首都が泗沘に遷都された直後に都城の中心地に建立された寺院跡です。南北の一直線上に中門・塔・金堂・講堂を配置した百済伽藍を採用しています。「飛鳥・藤原」の構成資産候補である山田寺跡でも、同じ伽藍配置が確認されています。また、定林寺の基壇には百済の寺院でよく採用されている瓦積基壇が発掘されていますが、「飛鳥・藤原」の構成資産候補である檜隈寺跡でも、講堂の基壇外装に瓦積基壇が採用されており、伽藍配置や建築技法に百済の影響を受けていることがよく分かります。定林寺址では、瓦積基壇が復元展示されています。また、隣接する定林寺址博物館では、百済仏教の由来や伝播、中国や日本の伽藍配置との比較等をデジタルコンテンツを通じて学ぶことができます。

▲復元された瓦積基壇

今回、扶余郡にある世界遺産「百済歴史地区」の4つの構成資産を紹介しました。「飛鳥・藤原」が建築・土木などの分野において、百済などの東アジア諸国との積極的な価値観の交流によって生まれたものであることがよく分かるとともに、整備手法や解説方法など参考になることが多くあります。

（明日香村総合政策課）